



Title	資本の有機的構成の高度化と国民資本の行方：その倫理的側面
Author(s)	野尻, 英一
Citation	社会理論研究. 2015, 16, p. 4-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84935
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『社会理論研究』第一六号 抜刷
二〇一五年二月二五日 発行

資本の有機的構成の高度化と国民資本の行方

——その倫理学的側面——

野尻英一

資本の有機的構成の高度化と国民資本の行方

——その倫理学的側面^①——

はじめに

社会理論学会第22回研究大会
(2015.1.17)

資本の有機的構成の高度化 と国民資本の行方

——その倫理学的側面——

野尻英一（自治医科大学）

野尻英一と申します。よろしくお願ひします。

私は、所属は自治医科大学ですが、医師ではなく、教養部で哲学を教えております。専門はヘーゲルです。みなさんの中には、なるほどヘーゲルだから国民国家論なのかと思われる方がおられるかもしれませんが、自分自身じつは国民国家論のような主題は不得意で、これまで大きな関心がありませんでした。ヘーゲルの国家論だと「法哲学」になります。私は「精神現象学」や「大論理学」を主に研究してきています。

しかし今回社会理論学会からのご依頼をいただきまして、ヘーゲルやマルクス、それに私が基盤の一つにしているモイシェ・ポストンの議論を使って、資本主義の機能において国家の果たす役割の観点から、国家の位置づけについての話ができるかと思ひ、お受けしました。

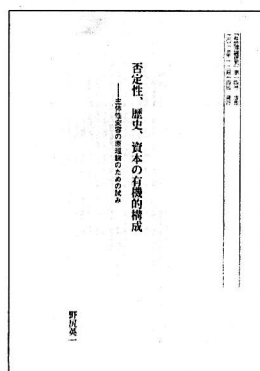
今日は「資本の有機的構成の高度化と国民資本の行方——その倫理学的側面——」というタイトルで話していきます。国民資本という言い方は深く考えて決めたわけではないのですが、「マルクスの言う」資本の有機的構成の高度化の問題と、国家として財政をどう立てるのか、経済をどう立てるのかといった問題との関連にアプローチした

野尻英一

本日のトピック

□その1：論文「否定性、歴史、資本の有機的構成」の問題意識について

□その2：いわゆる「国民国家」という枠組みの今日性について



野尻英一「否定性、歴史、資本の有機構——主体性変容の原理論のための試み」社会理論研究第14号、2013年

いと思います。その際に重視するのは倫理学的側面です。倫理学というと、善悪の問題の話かと思われてしまうのかもしれませんが。しかしそういうことではなくて、いわゆるわれわれ個人としての主体性に、こういった経済や政治の大きな流れ、グローバル化をふまえた流れがどのように影響してくるのかということを考えているのが倫理学的側面ということですね。何が善で何が悪かとか、あるいは《国民》としてのアイデンティティをどうするのかというような話ではありません。われわれの主体としてのあり方がどうなっていくのかということ进行分析したいという立場です。

今日のトピックは二つあります。まず「その1」として、去年の『社会理論研究 第一四号』に発表した「否定性、歴史、資本の有機構——主体性変容の原理論のための試み——」①という私の論文の問題意識がどのようなものであ

ったかということについて、ざっと説明させていただき、どんなことを考えて論じているかについてお話しします。そしてそれを受けた「その2」として、いわゆる国民国家という枠組みの今日性ということを考えていきたいと思います。

まず一四号の論文についてですが「主体性変容の原理論のための試み」というサブタイトルがついています。主体がグローバル化シヨンの流れの中でどう変わっていくか、これをヘーゲル、マルクスを使ってもう一度原理論を組み立て直

したいという基本的な問題意識です。これは二〇一〇年から二〇一一年にかけてシカゴ大学で、モイシェ・ポストンというマルクスの研究者の下で研究していたときにまとめた研究でCritical Historical Studies Conference (シカゴ大学) という学会での発表がもとになっています。その発表をもとにして論文を構成したものが二つあって、英語で書いたフルバージョンと、もう一つが日本語で書いたこの『社会理論研究 第一四号』掲載の論文です。日本語版は紙幅の制約で短縮しています。フルバージョンは、昨年夏「Canadian Social Science」という社会科学系の雑誌に「Negativity, History and the Organic Composition of Capital: Toward a Principle Theory of Transformation of Subjectivity in Japan」②として掲載されました。両者はコア理論の部分とは同じですが、英語版のほうは日本的な事情(社会、文化的背景)を、より詳しく論じる論文になっています。

今日は日本語版のほうをベースに紹介します。

一、論文「否定性、歴史、資本の有機構」の問題意識について

この論文は、次のような構成になっています。

「序 希望の喪失、マルチチュードはどこにいるのか」「一 新たな主体」、「二 歴史と否定性」、「三 マルクスにおける『資本の有機構』の軌道」、「四 社会的想像力の特徴 歴史的形態」、「〈付論〉 1

目次

- 序 希望の喪失、マルチチュードはどこにいるのか
- 一 新たな主体
- 二 歴史と否定性
- 三 マルクスにおける「資本の有機構」の軌道
- 四 社会的想像力の特徴歴史的形態

〈付論〉 1-3

この論文の位置づけ

- ・ 野尻のヘーゲル研究の立場からの、ポストン理論（マルクス）把握の試み。
- ・ フルブライト研究員プログラム：『現代のグローバル社会における「普遍的な個人」（マルクス）の実存的性質についての社会哲学的攻究』の部分的成果。

「3」です。この論文の位置づけは私のヘーゲル研究の立場から、モエ・ポストンのマルクス解釈を把握し、補完するという試みでした。ポストンの理論には、主体性の理論に欠点があるのでそれを補完したいという意図です。（ポストン理論については、後に詳しく述べます。）

簡単に言えば、ポストン理論の補完のために、マルクスの「普遍的な個人」という概念を使っています。資本主義のグローバルな拡散効果によって人間が「普遍的な個人」になつてい

く。ただしその場合に、個人がどのような実存的な経験をこうむるのかということについてマルクスは、立ち入る余裕はなかった。資本の運動を理論的に記述するというところで終わってしまったわけですが、ただ「普遍的な個人」という言葉は「ドイツ・イデオロギー」で使っています。そこには、資本主義のグローバルな拡散効果が個人にもたらす影響についての認識があります。

たとえば、ネグリ／ハートの「マルチチュード」という概念があります。ネグリ／ハートはプロレタリアートという言葉ではなくて、プロレタリアートを越えた存在として新しい人間存在が、資本の運動の効果として現れてきたと言います。簡単にいうと、資本の効果を逆に乗っ取って、資本から自立していくような人間が現れるという話です。ただ、彼らの理論は、特に「帝国」以降の書物で顕著ですが、コモنزをどう分配していくかという政治的な

問題になっている。資本の描く軌道の中で主体性のこうむる影響については、やはり深いレベルでの考察が足りないのではないか。一方で、私が依拠している理論の一つであるポストンの理論においては、資本の描く軌道の主体性への影響の考察は可能であるということが、繰り返し言及されていきます。ただそれは将来の課題であるとされていて、（今のところの彼の唯一の著作である）『時間・労働・支配』ではその考察は含まれていない。そこで言われていることは、資本

主義的な生産様式というのは二面性を持つていて、そういう構造によって普遍と特殊を同時に生み出すものだということです。普遍性というのは、グローバルな意味では二面性から生み出されたものであって、特殊なものや普遍的なもの、資本主義下にあつては同時に生成される。だから、特殊なものもともととあって、そこに普遍的なものが襲ってくるというような主張はロジックとしては倒錯していて、普遍的なものに襲われる中で特殊なものも生成するということです。

マルクスが「ドイツ・イデオロギー」で言っているのは、資本主義の文明化作用によってわれわれは「普遍的な個人になっていく」ということです。ただ、「普遍的な個人」というのはどういう個人なのか問題です。それは人によって見方が変わってきます。マルクスは一方で、プロレタリアートの悲惨な

マルチチュード？

- ・ ネグリ／ハートは、「マルチチュード」という用語で新しい人間の存在の出現を予言する。
- ・ しかし、彼らが問題にするのは、結局のところ、「コモنز」（不変資本としての富）の分配の公正の問題である。そこでは、資本の描く軌道の中で主体性の被る影響については、考察されていない。

ポストン理論と主体性

- ・ ポストン理論においては、資本の描く軌道の主体性への影響についての考察が可能であることが示唆される。
- ・ 資本主義的な生産様式は、その二面性によって普遍と特殊とを同時にうみだし、その二元論に主体を包摂する。

現状を『資本論』でさかんにレポートしている。しかし他方、それがやがて啓蒙されたグローバルな主体になっていくかのような叙述が「ドイツ・イデオロギー」等にはあって、そのところの関係がどうなっているのかが問題になります。私としては、ある条件下においては、「普遍的なもの」との接触のさなかで、「深く内面的なこと」や「過去」を考えてしまうことが人にはある、ここから「ロマン主義」的思考や文化が生まれる、ということを考えています。なぜそんなことをいうかという点、日本の問題を考えているからです。もっと具体的にいうと、クール・ジャパンともてはやされていますが、日本におけるサブカルチャー興隆の構造を念頭に考えています。未来に向かって投企されるべき社会的な想像力あるいは歴史的な想像力みたいなものが文化商品の領域で消費されている面があるのではないかと。

具体的な個人というもの

も、そういう条件下で「未来」や「社会」を志向せず、「過去」や「内面」を志向するようになる。商品と幻想性にはあふれているが、「希望」がどうやら欠けているということが現代日本社会にはあるのではないかと。では、その「ある条件」とはどういう条件なのでしょう。

そこで、マルクスの言う「新たな主体」（『経済学批判要綱』）という概念について考えてみます。それは定式化して言えば、「（交換）価値」としての「抽象

的時間」の支配から解放された人間であると言えます。したがってそれは、「価値」を生み出す資本の有機構成から解放された人間です。しかし、そのときに主体に戻ってくるものは「時間的ゆとり」なのかということが問題です。もう少し簡単に言うと、資本の有機構成の高度化の中で、人間は機械を使った生産によって、労働をしなくて済むようになるはずであるけれども、実際には済むようにはならないわけです。長時間労働にずっと拘束され続ける。生産性はずっと上がっていく、上がっていくが忙しい、ということが変わらない。ポストンの理論はそういうことを説明しようとしたものです。いわばマルクスの理論を書き換える。書き換えるといっても、内容を変えたいというわけではなく、こういうことをマルクスは言おうとしていたという解釈を、正確な読解の上で再構成しようとしている。

マルクスが『資本論』で

言っている「資本の有機構成の高度化」という概念は、こういうことです。人間労働の「社会的性格」というものが「可変資本」として資本の構成に包摂され、それが産み出す剰余価値が過剰労働時間に変換され、資本の下に還流して不変資本として蓄積されていく。人間は協力して働くという性格を持っていますが、その力を使って生産力を上げていき、「不変資本」という形でそれを蓄積していくわけです。マルクスのいう人間労働の「社

しかし、人は、

- ・ ある条件下においては、「普遍的なもの」との接触のさなかにおいて、「深く内面的なもの」や「過去」を考えてしまうことがある。
- ・ これが、「ロマン主義」の根源である。
- ・ そのとき、人は、「過去」と「現在／未来」とのアンチノミーに囚われることになる。

マルクスの「新たな主体」について考える

- ・「(交換) 価値」としての「抽象的時間」の支配から解放された人間である。
- ・したがって、それは「価値」を生み出す、資本の有機的構成から解放された人間である。
- ・しかし、そのときに戻ってくるのは、ただの「時間」なのか。

のような否定性が、精神の運動を駆動し、人間の時間である「歴史」を生み出すのです。ヘーゲルの哲学(『精神現象学』)には、こうした洞察が含まれています。それをマルクスに持ってくると、こういう言い方になります。資本の有機的構成は、ヘーゲルのいう「具体的普遍」を「抽象的普遍」に変成する。より局所的な社会的、歴史的想像力であった「否定性Ⅲ」は、この変成において抽象化された形に変換されていくということです。それを日本の状況に当てはめてみると、社会的想像力の特殊歴史的形態の一つとしてわれわれの想像力のモードの現状を論じることができる。資本の有機的構成の高度化にしたがって、「否定性Ⅲ」は、生産局面から解放されていく。直接の人間労働は相対的に不要になっていきます。富を生み出すための知的に高度な労働というのは相変わらず必要ですが、一方で総体的にはわれわれの労働力の社会的性格(それ

会的性格)は、私なりの解釈ではヘーゲルのいう「具体的な普遍」であると言えます。私は、それは抽象的だけれども具体的な、想像力につながる人間の力だと捉えています。そしてそれをヘーゲルにおける否定性の概念の種類の分けをしたうえで、「否定性Ⅲ」として位置づけます。それは意識の否定性でも、対象の否定性でもなく、むしろそれら両者の根源にある否定性です。それは、意識を自己意識に変成させる否定性であり、社会的、歴史的想像力の源であると言えます。こ

を社会的な想像力と私は捉えますが)は生産から解放されていく。しかし一方で、生産局面から解放されていく人間労働の社会的性格を「具体的な普遍性」として發揮し、身近な人々との関係性として發揮するための社会諸形式はすでに失われてしまっているわけです。近代化、資本主義的な関係に取り込まれたことによって抽象化されて失われてしまっている。だから、われわれの高度に発達せられた社会的性格をどこに持つて行くかということが問題です。このことが、一九六八年以降の日本社会における消費領域における幻想性の高度化を説明するのではないかと考えているわけです。

資本の有機的構成が、局所的に非常に高度に高まった特殊例(あるいは先駆例)としての、日本資本と日本における主体性という捉え方をしています。高度に知識化、情報化、組織化された日本資本の構成(不変資本)は、国内の労働力の価値が上がっていることで海外生産拠点の廉価な直接的労働(可変資本)を取得して、剰余価値を生み出しています。それは資本主義の基本的な法則です。発達した科学技術を使った生産の設備および管理運営の方法を、労働力が安価に手にはいると持つていくわけです。この機械と人間の組み合わせ、これがマルクスの言う「資本の有機的構成」という考え方です。それが産み出す剰余価値は、しかし日本資本の名の下に日本に還流します。このように

資本の有機的構成 Phase I

- ・それは、人間労働の「社会的性格」を「可変資本」として包摂し、過剰労働時間として資本のもとに還流させ、「不変資本」としての資本の増大を促す構成である。
- ・マルクスの言う、労働の「社会的性格」とは、ヘーゲルの言う「具体的な普遍」(否定性Ⅲ)であると言える。

ヘーゲルの否定性Ⅲ

- それは、意識の否定性でも、対象の否定性でもない、むしろそれら両者の根源にある否定性。
- それは、意識を自己意識に変成させる否定性であり、社会的、歴史的想像力の源である。
- このような否定性が、精神の運動を駆動し、人間の時間である「歴史」を生みだす。

資本の有機構成 Phase2

- 資本の有機構成は、ヘーゲルの言う「具体的普遍」を「抽象的普遍」に変成する。
- より局所的な社会的、歴史的想像力であった否定性Ⅲは、この変成において、抽象化される。

日本：社会的想像力の特殊 歴史的形態

- 資本の有機構成の高度化にしたがって、否定性Ⅲは、生産局面から解放されていくが、すでにそれを「具体的な普遍性」として発揮するための社会諸形式は失われている。
- このことが、1968年以降の、日本社会における消費領域における幻想性の高度化を説明する。

蓄積、維持された不変資本の生み出す価値によって、物質的には不自由のない生活がいまのところ可能です。国内には単純労働の職がどんどんなくなっていくわけですが、いまのところは日本に蓄積した富と、戻ってくる富があるのでわれわれの経済生活は成り立っています。早い話がプレカリアートやニート、フリーターや引きこもりの生活が可能になっているのは、こうした蓄積と還流があるからです。しかし、そこには「希望」がなくなっている。資本の有機構成は、国内という枠内に収まらず、海外に広がってその構成を維持しています。国内に多くの産業予備軍が生じて、彼らは生産に携わっていない。そのことが、主体性の問題、精神性の問題として浮かび上がってくるわけです。日本のロマン主義（例えばジブリの作品などを思い浮かべていただければ良いわけですが）、なぜあんなすばらしく美しい物語世界を日本人は作れるので

でしょうか。私自身もジブリ作品は好きですし、一方的に批判するわけではないのですが、宮崎駿という作家のすごいところは、あんなものに子供は浸ってはいけいないのだといながらも、ああいう作品を作り続けるところです。資本の有機構成から解放されながらも、商品に束縛され続ける「否定性Ⅲ」は、ロマン主義の二つのパターンである「昔はよかった」、「本当に大事なものは私の中にあった」というかたちで発現されます。この二つが典型的なパターンですが、こういう風にロマン主義のかたちでそれは発現します。これは、高度な「不変資本」の蓄積の上に衣食足りてしまう日本に固有の特殊状況であり、これはこれで一時的な状況であると思います。古市憲寿は『絶望の国の幸福な若者たち』^①という本で、今の若い人たちは未来に希望が持たなくても幸福なのだと言っています。しかし、友達と毎日仲良くやって楽しい

特殊例としての日本資本と主体性

- 高度に知識化、情報化、組織化された日本資本の構成（不変資本）は、海外生産拠点の廉価な直接的労働（可変資本）を取得し、剰余価値を生みだす。
- その剰余価値は、日本資本の名のもとに、日本に還流する。
- このように蓄積、維持された不変資本の生みだす価値によって、物質的には不自由のない生活が可能。
- しかし、そこには「希望」がない。

日本ロマン主義の行方

- 資本の有機的構成から解放されながらも、商品空間に束縛され続ける否定性IIIは、「昔は良かった」「本当に大事なものは私の中にあった」というかたちで、ロマン主義的に発現される。
- これは、高度な「不変資本」の蓄積の上に衣食足りてしまう日本に固有の特殊状況。

局所的解

- 日本社会が「希望」を取り戻すには、資本のナショナルリティ（国籍性）の破壊が必要。社会的流動性、移民（転出、転入）の増大。

毎日という見方は、大局的な状況を見ていないと思います。一時的な状況、当座の中で、享受できている状況にすぎないわけです。大沢真幸はその辺を的確に批判していて、これは「現実への逃避」であると述べています。

現代の資本主義社会は、理念的に抽象度の高い理論でなくては理解できないところがある。ある人はサブカルチャーに逃避している。ある人は現実逃避している。これを解決しようという場合に、（一般解、つまり最終的な解決方法としてではなく）局所的解として言うならば、資本の有機的構成の高度化してしまったものを戻すか、もしくは労働力の方を高度化するかのどちらしかないわけです。その場合、基本的には資本のナショナルリティ（国籍性）の破壊が必要となってくる。社会的流動性、移民（転出、転入）の増大によって、希望が出てくることになる。それをやるべきだといっているわけではありま

せん。ただ、日本の事例を一つの考察材料として、資本の有機的構成の高度化が全球的に飽和したときに何が生じるかを考えることができる。

日本のサブカルチャー（機動戦士ガンダムとか）を見てみると、宇宙へ行くのが既定事項みたいな気分になってきますが、それも局所解ですね。宇宙への進出は資本の有機的構成の高度化を低減しますが、問題の先送りになる。一般解（最終的な解決）を求めるためには、「抽象化された普遍」（抽象化された否定性III）の主観的效果について考える必要がある。つまり資本の有機的構成の高度化がきわまったときに起こることは、たんに優雅な時間が戻るだけではないということについて、理論化する必要がある。それが「主体性変容の原理論のための試み」ということの意味です。

一般解

- 日本の事例を一つの考察材料とし、資本の有機構成の高度化が、全地球的に飽和したときに生じる、「抽象化された普遍」（抽象化された否定性Ⅲ）の主観的効果について考える必要がある。そこで起こることは、おそらく、たんに優雅な時間が戻るだけではない。

→ヘーゲリアンとしてのポストン理論への回答

ことが起る。いや正確には、楽になつていないことではない。車の運転をして移動すれば歩くより楽だし、医療が発達して病氣も病院で治してもらうことができ、楽なのですけど、しかしわれわれの労働ということに着目すると、労働時間はまったく減らない、長時間労働のままであるということがある。生活の物質的水準も上がっているのに、稼ぐために働かなくてはならない、生活のために朝から晩まで働かなくてはならないという状況はずっと変わっていないのです。それ

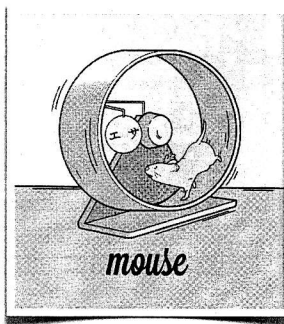
さてここでポストン理論について、簡単に復習しておきます。ポストン理論とは一体何だったのでしょうか。『時間・労働・支配』は、英語の題名が「Time, Labor, and Social Domination」となっています。批判も多く出ています。そういう意味では重要視されている論文であると言えます。一つには「労働と時間の弁証法」のトレッドミル効果を資本論から図式的に取りだしている。マルクスを新しく解釈したという本ではむしろなく、資本論で言っていることはこういうことだと抜き出してあります。社会的平均労働時間というものが、価値を測る基準として機能し、その効果として生産システムとそれによって開発される商品の技術的、物質的水準はどんどん上がっていく。剰余価値を生み出すためには、上げざるを得ないわけです。われわれの生活は便利になるが、では楽になつているかというところまで楽になつていないということが起る。いや正確には、楽になつていないこと

を「労働と時間の弁証法」によってもたらされる「トレッドミル効果」とポストンは呼びます。トレッドミルというのは足踏みの白のことでありますが、走つても進まないルームランナーのようなものです。楽になつていない。

もう一つ「変容と再構成の弁証法」ということが『時間・労働・支配』では言われますが、われわれの時間の密度というものが上がっているということです。技術的に高度な優れたものを生み出すためにかかる時間というのは、どんどん短くなつてくる。たとえばiPhoneを三百年前の人に作ってもらおうとしたら、どれだけ時間がかかるでしょうか。簡単に言えば三百年かかるわけです。Phoneというものが製造可能になるまで、それだけの時間がかかった。しかし、現在、中国の工場で何人かはわかりませんが例えば一〇〇人ぐらいが携わっているラインで、（労働日で言うと）三日で一台作るわけです。それを日本のサラリーマンは平均給与の三日分に相当するお金で買うという構図になつていく。ここに労働の密度（高度化の度合い）の差が現れています。われわれ自身の労働密度はこのように上がっているが楽にならない。

それから、直接的人間労働の不要化、剪断圧力、歴史的時間の解放ということについて話します。不変資本と可変資本の割合が資本の有機構成ということですが、不変資本というものは機械、科学技術を使つた生産システムと原材料で、一

1. 労働と時間の弁証法の、トレッドミル効果



（上図は木暮太一『僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか?』より）

2. 変容と再構成の弁証法 (iPhoneの歴史的時間密度)

近代以前
1 (?) 人×300年
Ⅱ
中国のiPhone工場
100人 (?) ×3日
Ⅱ
日本のサラリーマン
1 人×3日

時間密度の比
≧
30,000:1



方、可変資本は人間労働ですが、資本主義Ⅱ近代システムでは、人間労働の能力は不変資本に転化されていきます。生産システムという形で機械技術、あるいは物質的な蓄積として不変資本が増大していきます。だから人間があまり働かなくても非常に高度な物質的な富を莫大に生産することが出来る仕組みになっていきます。しかし抽象的時間、社会的平均時間によって労働を測るかぎり、基本的には一日働いたら一日暮らせるという額しか報酬は支払われないわけです。もちろんプリウスやiPhoneを買って現代的な生活を維持するという意味での生活費が出ますから、本当に食べられるだけということではありません。ですがわれわれの現状は、とにかく「普通」の生活を維持するために、やはり朝から晩まで働かなくてはならないわけです。労働の内容は上がっています

(高度化している)。しかし暇にはならない。ここに矛盾、剪断圧力(ポストンの用語)が生じます。

一方で、人間が持っている能力、そこには想像力なども含まれますが、それが労働局面からどんどん遊離していく。ではそれをどこで使うかというと、消費です。高度な労働者になることができる人は、生産局面に内在することが出来ますが、ものすごく忙しくなる。一方で単純な労働力しか持たない人は、単純労働をしながら、ほんらい労働能力となるはずの資質を

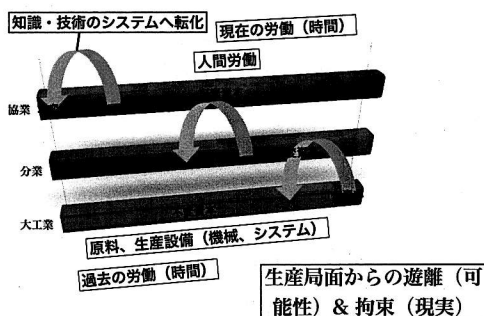
持て余すことが起こってくる。

古いコメントですが、一九六一年に、福田恒存は「人間は生産を通じてしか附合へない。消費は人を孤独に陥れる」(「消費ブームを論ず」と言っています。名言です。「抽象的時間の支配」ということをポストンは前面に主張しますが、支配の効果として生じるのは、労働の格差です。労働の格差というのは、一つには知識集約的に高度な商品開発や経営に必要な労働力を持つ層は高収入を得るが、長時間労働に拘束される。例えば医師などはそうですね。医師免許を取れば確かに職にあぶれることはないですけど、ものすごく忙しい。私の勤務校は医科大学ですが、どうしてそうなるのかということは、社会の仕組み、社会理論を勉強しなくてはわからないのだよと、授業では学生たちに話しています。しよせん医師というのは高度な技術者という面があります。さてその一方で、高度な労働力を持たない層は低収入・長時間労働に従事することになり、またプレカリアート化し、労働予備軍ともなります。貯蓄、社会保障などが厚い社会では二トが出現します。

二、いわゆる「国民国家」という枠組みの今日性

3. 直接的人間労働の不要化=剪断圧力、歴史的時間の解放

資本の有機構成の高度化



抽象的時間による支配の 効果＝労働格差

1. 知識集約的に高度な商品開発や経営に必要な労働力をもつ層は高収入を得るが、長時間労働に拘束される。

2. 高度な労働力をもたない層は低収入・長時間労働、プレカリアート化、労働予備軍となる。貯蓄、社会保障などが厚い社会では、ニートが出現する。

われわれがこうした国家予算の現状について考えるとき、国家の財政は破綻するのかもしれないのかということがまず心配になります。財政を支えるために赤字国債を発行し続ける。これについて大丈夫なのかと心配になります。破綻して、日本国債がいつか暴落してとんでもないことになるという人たちがもれば、ぜんぜん大丈夫、破綻しないのだという人もいます。これがよくわからない。われわれの生活の保障、この先、雇用や医療や年金はどうなっ

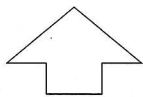
以上が論文「否定性、歴史、資本の有機構成」を書いていたときに考えていたようなことですが、以下では「いわゆる『国民国家』という枠組みの今日性」について考えていきます。おりしも今週、日本の国家予算が出ましたが、社会保障費の増大とこれを赤字国債の増大でまかなう仕組みです。安倍晋三首相の進めるアベノミクスというのは、基本的には量的緩和によって株高、円安を誘導するという介入をやっています。一方で消費増税をしながら、賃上げを政治圧力で導入しようとしています。ある意味では矛盾しているところもある。トマ・ピケティなどはつきり言っていますが、インフレにしたいのであれば消費税を上げてはだめだと。たしかにそのとおりだが、問題はビジネスの創生に結びついていない、経済を活性化させる施策についてあまり本格的ではない点ではないか、と思います。ただ私は、今日は具体的な政策論を論じるわけではありません。

われわれがこうした国家（precarity）はこうしたものの喪失を意味する。歴史上の一時期、特定の国々における特定層の労働者のみが享受したものの喪失である。日本は最近、そうした喪失を経験した国の一つである。」(pp.67)

さて、ここで取り上げたいのは、トーマス・フリードマンの『フラット化する世界』③です。二〇〇五年に出た本で、今日のメイントピックの一つになります。ビジネスマンに大ヒッ

ていくのかと不安になります。しかし、ここで逆に問い直してみます。なぜそういうことが問題になるかというと、基本的には「国家」がわれわれの生活や雇用を全般的に確保するべきであるという考え方がわれわれにあるからです。それゆえこのような問題提起になります。おそらく国家はわれわれの生活を守るのかどうかという問題意識それ自体が問題です。Anne Allison という学者が『Precarious Japan (不安な日本)』という最近出版された本④で書いています。「歴史的に見れば、雇用が不安定 (precarious) であるというのは例外的な事態ではなく、むしろそれが常態であった。米国で言えば、大恐慌後のニューディール政策を契機として、フォードイズムと労働組合の時代が訪れ、一九五〇年代までに正規雇用雇用が「正常」化した。仕事の保障が保障するのは、収入と職に留まらない。それはアイデンティティとライフスタイルを保障し、安定性への愛着と欲望を育てる。雇用の不安定性 (precarity) はこうしたものの喪失を意味する。歴史上の一時期、特定の国々における特定層の労働者のみが享受したものの喪失である。日本は最近、そうした喪失を経験した国の一つである。」(pp.67)

1. 国家の財政は破綻しないのかという心配
2. われわれの生活の保障（雇用、医療、年金）はどうなるのかという不安



「国家」がわれわれの生活や雇用を全般的に
確保してくれるべきだという考え方

グローバリゼーション3.0の時代

デジタル化とネットワークによるアウトソーシング（仕事の一部を海外に外注する）とオフショリング（海外に生産拠点を移す）の普及により、就業や起業の形態が個人ベースになる（フラット化する世界）。どこにいてもどんなことでもできる世界。

グローバリゼーション3.0の時代

「市場経済の鉄則では」と、共産主義国の市長（大連）が私に説くのだ。「もっとも豊富な人的資源と安価な労働力を持つものに、起業家も現存の企業も自然に惹きつけられます」（上54頁）

フラット化する世界で「国家」が発展のためになすべきこと

- 1) 優秀な企業や労働力を惹きつけるような法整備（税制、労働法、移民法）を行なってオフショリングを誘うこと。
- 2) 教育の水準を引き上げてアウトソーシングを誘う、もしくはイノベーション力をもとにアウトソーシングを行なうことのできる高度な労働力を創出すること。

五四頁）。

こうしたグローバリゼーションの進展の中で「国家」はどういう果たすべき役割を持っているのでしょうか。フリードマンの視点から言うと、国家の役割はインフラ整備をすることです。「多くの若者たちがフラットな世界のプラットフォームに接続できるインフラを整備する。安い費用で使えるインターネット・ブロードバンド接続の実現、携帯電話網、近代的な飛行場や道路。それから重要なのは教育である。フラットな世界でイノベーションを行い、共同作業ができるように、広い範囲で理想の教育をほどこす。要するに、グローバル化した企業の中で仕事ができる能力、知的に高いコミュニケーション能力、言うまでもなく語学、こうした国民への教育を施行するのが国家の役割であるとフリードマンは言います。

それからガバナンスの面も重要です。フラットな世界のプラットフォームと国民のあいだの流れを、できるだけ生産性が高いやり方で支援する。国全体の創造力を高め、統治し、よい方向に進めるには、高度な官僚機構が欠かせないと言われています（これは日本は持っています）。それから、環境の整備です。緑の土地を保護する国は、知的労働者を惹きつけると言われています。

以上をまとめると、国家の役割として言われているのは、第一には、優秀な企業や労働力を惹きつけるような法整備（税制、労働法、移民法）を行って、つまり起業をしやすくして、オフショリングを誘うことです。第二には、教育の水準を引き上げてアウトソーシングを誘う、もしくはイノベーション力をもとにアウトソーシングを行うことのできる高度な労働力を創出すること。以上がフリードマンによれば、フラット化する世界で「国家」が発展のためにな

無敵の民（新ミドルクラスの誕生）

「グローバリゼーション1.0では、国が、グローバルに栄える方法か、最低でも生き残る道だけは考えなければならなかった。グローバリゼーション2.0では、企業が同じように考えなければならなかった。いまのグローバリゼーション3.0では、個人が、グローバルに栄えるかせめて生き残れる方法を考えなければならぬ」（中63頁）。

すべきことであるということになります。

ここでこの書物で述べられている、「無敵の民（新ミドルクラス）の誕生」について触れます。

「グローバリゼーション1.0では、国が、グローバルに栄える方法か、最低でも生き残る途だけは考えなければならなかった。グローバリゼーション2.0では、企業が同じように考えなければならなかった。いまのグローバリゼーション3.0では、個人が、グローバルに栄えるかせめて生き残れる方法を考えなければならない」（邦訳中巻六三頁）。

「急激なテクノロジーの変化に適応し、国際競争に対応し、新ミドルクラスの仕事を求める、スキルと教育程度の高い労働者の需要が、現在はいくつかの

無敵の民（新ミドルクラスの誕生）

「アメリカの長期経済成長と生活水準の維持は、これまでずっと、テクノロジーを梃子に賃金の安い外国の労働力と競争することによって成し遂げられてきた。高度の生産性を達成することに集中し、競争力のある商品やサービスを生み出すいっぽうで、労働者に適切な賃金を払ってきた。だが、それを続けるためには、最新のコンピュータや電気通信と、練度の高い労働力を組み合わせなければならない。そういった労働力によって研ぎ澄まされたベストプラクティスと新しいスキルに、最高の新テクノロジーを加味したものをこしらえる——機械（マシーン）と人間が協力して、いっそう生産性を高める。この中枢から、多数の新ミドルの仕事が生まれる」（中83頁）

49

無敵の民（新ミドルクラスの誕生）

「政府や企業の任務は、すべての人間に終身雇用を保証することではない——そういう時代は終わった。世界のフラット化とともに、そういう社会契約は破棄された。今の政府が国民に保証でき、保証しなければならないのは、『雇用される能力』を高められる機会である。」（中196頁）

なく高まっている。……アメリカでは、新ミドルクラスの仕事は絶えず誕生している。世界のフラット化にもかかわらず大規模な失業が発生しないのは、そのおかげだ。……フラット化した世界に見合ったスキル——（たとえ一時的にでも）かけがえのない存在になり、特化し、地元に着し、それによって（たとえ一時的にでも）無敵の民になり、上昇する賃金が得られるようなスキル——を身につけなければならない」（邦訳中巻七二頁）

要するに、このフラット化する世界で生きていくためには、勉強をしなくてはならないということです。自分の労働力を高めるために勉強する。次は書中で引用されているある女性の考えたことです。

『テクノロジーに詳しい人はおおいにわけるわけだから、自分を差別化して、誰かと対抗し、新しい仕事に就くには、どうすればいいのかしら？』とマーシ

「想像力」の問題

11.9 (ベルリンの壁崩壊) の想像力と

9.11 (国際テロ) の想像力

「世界をフラットにするやり方は二つある。一つはイマジネーションを使って、他人を同じレベルまで引き上げるというものだ。もう一つは、イマジネーションを使って、他人を同じレベルまで引きずり落とすというものだ。」

「想像力」の問題

「夢よりも思い出の多い社会では、多くの人々が日々過去ばかりに目を向けている。尊厳や自己肯定や自尊心を現在から探すのではなく、過去にこだわって得ようとする。それともたいがい真実の過去ではなく、想像と憧れから派生した過去である場合が多い。当然ながら、そういう社会は、イマジネーションをすべて費やして、じっさいよりもずっと美しい想像上の過去をこしらえ、ロザリオが触って不安をまぎらす数珠の代わりにして手放そうとしない。より良い未来を想像してそのために行動する、ということをしてない。」 (235頁)

「想像力」の問題

「事件を頭のなかで再生するのがイマジネーションであってはならない。新しい脚本を書くことがイマジネーションでなければならない。……過去をふりかえるのではなく未来を見つめるのが、開国以来、アメリカの国際社会での役割だった」 (234頁)

アは考えた。『未来はつねに新しいことが待ち受けているから、たえず勉強するしかないというのが結論だった。そのとき、自分は〈マーシア個人商店〉だ、ということを知った。〔学び続ける〕責任は自分一人が負っている。資源は手に入る。あとは自分が率先してやるかどうかだ。』(邦訳中巻八六頁)。

「アメリカの長期経済成長と生活水準の維持は、これまでずっと、テクノロジを梃子に賃金の安い外国の労働力と競争することによって成し遂げられてきた。高度の生産性を達成することに集中し、競争力のある商品やサービスを生み出すという、労働者に適切な賃金を払ってきた。だが、それを続けるためには、最新のコンピュータや電気通信と、練度の高い労働力を組み合わせなければならぬ。そういった労働力によって研ぎ澄まされたベストプラクティスと新しいスキルに、最高の新テクノロジを加味したものをこしら

える——機械(マシーン)と人間が協力して、いっそう生産性を高める。この中枢から、多数の新ミドルの仕事が生まれる」(邦訳中巻八三頁)。

だから心配する必要はないのだというわけです。フリードマンは、資本の有機構成という概念は使わないが、マルクスの考えは理解しているのではないかとと思われるところがあります。じつはこの本の中でも、マルクスへの言及は出てきます。グローバリゼーションを初めてきちんと指摘したのはマルクスだと、正しく指摘しています。

話を戻すと、フリードマンによると、グローバリゼーション三〇のなかで国家が果たすべき役割は、雇用の保証ではなく、労働力の高度化をサポートすることだということになります。

「政府や企業の任務は、すべての人間に終身雇用を保証することではない

「想像力」の問題

Different context, different narrative, different imagination.

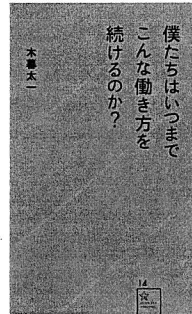
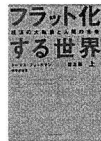
「しごく単純なことだ。前向きなイマジネーションを現実に変えられるような環境を若者にあたえる。不満を持っている若者に、裁判官を山羊一頭で買収しなくても法廷できちんと不満を裁いてもらえるような環境をあたえる。起業家精神に富む発想を推し進めて、金持ちになり、創造的な人間になり、国民の尊敬を集める人間になれるような環境をあたえる。出自などには関係なく、苦情や思想を新聞で発表できる環境をあたえる。そうしたらどうなるか？ 世界を粉みじんにしたくはならないだろう。世界の一員になろうとするはずだ」 (245頁)。

55

『フラット化する社会』の長所と短所

長所：資本の有機構成の高度化が個人にもたらす効果についてよく理解している。マルクスのとさえ言える。

短所：解決策が、結局は、アメリカ的競争主義。



木暮太一『僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか?』2012年

57

——そういう時代は終わった。世界のフラット化とともに、そういう社会契約は破棄された。いまの政府が国民に保証でき、保証しなければならぬのは、『雇用される能力』を高められる機会である。」(邦訳中巻一九六頁)。

私がこの人の著作が優れていると思うのは、ちゃんと主体性や「想像力」の問題に言及しているからです。一一・九(ベルリンの壁崩壊)の想像力と九・一一(国際テロ)の想像力について、という主題を論じているところがあります。フラット化する世界にあつて、人々の想像力の向く方向が逆になっているとフリードマンは言います。

「世界をフラット化するやり方は二つある。一つはイマジネーションを使って、他人を同じレベルまで引き上げるといふものだ。もう一つは、イマジネー

ションを使って、他人を同じレベルまで引きずり落とすといふものだ。」
二つの事例が引用されます。

「デビット・ニールマンは、樂觀的なイマジネーションと、フラットな世界の簡単に利用できるテクノロジを使って人々を引き上げた。想像もしていなかったような新航空会社「ジェットブルー」を立ち上げて成功させ、利益の一部を従業員の災害救援基金にふりむけた。ウサマ・ビン・ラディンとその弟子たちは、歪んだイマジネーションと、同じフラットな世界のツールを使い、奇襲攻撃を仕掛けて、アメリカの力の象徴であるツインタワーを自分たちのレベルに引き落とした。」(邦訳下巻三三〇頁)。

ツインタワーを攻撃した人たちはいわば起業家として非常に優れた能力を持っていたと言われています。しかし彼らは能力をこっちの方に向けてしまっ



村上龍『希望の国のエクソダス』2000年

た。想像力を向ける方向が大事だというわけだ。

「夢よりも思い出の多い社会では、多くの人々が日々過去ばかりに目を向けている。尊厳や自己肯定や自尊心を、現在から探すのではなく、過去にこだわって得ようとする。それともたいがい真実の過去ではなく、想像と憧れから派生した過去である場合が多い。」

これはまさしく私が前半に触れたロマン主義の問題ではないでしょうか。

「当然ながら、そういう社会は、イマジネーションをすべて費やして、じつさいよりもずっと美しい想像上の過去をこしらえ、ロザリオが触って不安をまぎらす数珠の代わりにして手放そうとしない。よりよい未来を想像してそのために行動する、ということをしていない。」(邦訳下巻三三五頁)

想像力が過去に向かうか、未来に向かうかという問題です。これは現在の日本における想像力の特殊な

形態(ロマン主義)にも通じる話です。イスラム国

みたいなものに惹きつけられてしまう主体性の問題

も、同じような構造として説明できるのではないか。

「事件を頭のなかで再生するのがイマジネーションであつてはならない。新しい脚本を書くことがイマジネーションでなければなら

ない。……過去をふりかえるのではなく未来を見つめるのが、開国以来、アメリカの国際社会での役割

だった。」(邦訳下巻三三四頁)。

「Different context, different narrative, different imagination」とフリードマンは言います。つまり語りを変えていけということです。

「ごく単純なことだ。前向きなイマジネーションを現実に変えられるような環境を若者にあたえる。不満を持つている若者に、裁判官を山羊一頭で買収

しなくても法廷できちんと不満を裁いてもらえるような環境をあたえる。起業家精神に富む発想を推し進めて、金持ちになり、創造的な人間になり、国民の

尊敬を集めるような人間になれるような環境をあたえる。そうしたらどうなるか? 世界を粉みじんにしたくはならないだろう。世界の一員になるうとするはずだ」(邦訳下巻二四五頁)。

要するに、想像力といったものが非常に重要になってきている。フリードマンは私のように哲学的な理論や概念を使っていますが、想像力の問題が今日大事であるということはい

言っている。そこに気付いているわけです。

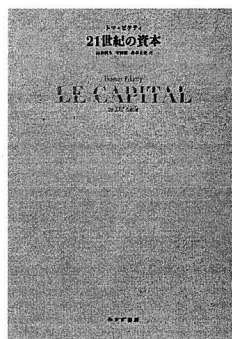
以上、見てきましたが、フリードマンの議論には長所もあれば短所もあります。長所としては、資本の有機構成の高度化が個人

にもたらす効果についてよく理解している。マルクスの認識がそこにはあるとい

つてもいいかもしれません。しかし短所は、彼の提唱する解決策が、結局はアメリカ的個人主義、競争主義だとい

うところなんです。一生勉強し続けなければいけない。フリードマンの議論

「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」(314頁)



トマ・ピケティ『21世紀の資本』2013年（原著）

は、大きな土台がアメリカの文化になっていますが、本人にはその自覚はない。広範な取材に裏打ちされた、グローバル経済のもたらす効果についての非常に本質的な認識がありますから、一読に値します。しかし、近代文明や資本主義に対する批判的な問題提起はない。そこところが欠点です。

フリードマンと話の規模は異なりますが、同じような原理に辿り着いたものとしては、木暮太一という人がいまして、『僕たちはいつまでこんな働き方を続け

るのか？』^⑩という本があります。この人はマルクスの『資本論』を一人で勉強しています。左翼的な文脈や従来のマルクス解釈に惑わされずに、資本の有機的構成の高度化が資本論の核心であるというをよく理解している。しかし大きな欠点が一つあります。資本の有機的構成の話しを、木暮さんは個人ベースで理解してしまっている。個人のレベルで不変資本と可変資本のバランスを考えていて、不変資本、つまり応用力があつて長持ちする社会的に有用な能力を身につける、というわけです。資格を取れど。そうするとあくせくずつと働いて安い賃金ということにはならなくて、どんどん楽ができるようになっていくと述べています。マルクスの述べたことは社会ベースで理解しなければならぬのですが、それを個人の生き方のモデルとして理解してしまっている。おもしろいことに、解決策がフリードマンと反対になっています。木暮さ

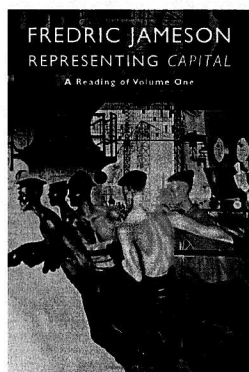
んは、イノベーションのペースの遅い職業（会計、営業、出版）を選べ、と言います。イノベーションの速い業界に行くと、たとえばプログラマーになったりすると、一生懸命勉強してプログラム言語を身につけても、すぐ別の言語ができたりして、ずっと勉強しなくてはならないし、勉強もそのうちできなくなつてたいへんだというわけです。確かにプログラマーの抱えている問題はそこにあります。ただ木暮さんの言うように、会計士とか、営業、出版を選べば、イノベ

ーションの波にまけないかというところとは、フリードマンのフラット化する世界の認識から言えば、考えが甘いのではないかと思います。

じつは日本の書物で、フリードマンより早い現状認識の提示と解決策の提起（しかも主體的な倫理面での問題の指摘も含む）を行っていたものがありました。もう国家には期待すべきでないと認識して、自分たちがグローバル化社会に適応する若い世代を描いた物語です。村上龍の『希望の国のエクソダス』^⑪ですね。簡単にいうとこの小説は、日本社会の現状にそぐわない学校教育に絶望した中学生が数十万人規模で集団不登校を始め、コンピュータネットワークを駆使して全国の中学生を組織化したビジネス展開を行い、ヘッジファンドと連繋した為替投資によって巨額の材を獲得しながら、自分たちの未来を築き始めるという物語になっています。綿密な取材と日本の現状に対する真摯

なるほど経済的不平等は、確かに資本の運動の効果の一つである。重要な効果の一つであるといっても良い。しかしそのことはすでにマルクスの時代の以前から明らかなことであり、それは正のために有効な政策をどう定めるのがマルクスの問題意識であったとするならば、あれほどの綿密で周到な理論構成を組み立てて、〈資本〉という対象の運動の性質を分析する必要があったらうか。そこにはやはり、われわれ人間が生み出してしまった〈資本〉という観念的かつ物質的な構成物が獲得してしまった自律的な運動性への問題意識があったといつてまちがいはないと思われる。つまり資本の運動がわれわれ人類の主体性や社会のあり方、そして地球環境までをもどのように変容させてしまうかという文明論的な問題意識である。

野尻英一「マルクス主義と近代性（モイシェ・ポストン）」訳者解説より、『変革のアソシエ』第19号（近日常）

Frederic Jameson, *Representing Capital*, 2011

68

な問題意識に裏打ちされたこの小説は、グローバル化した資本の流動に対応して社会を再構成することができない日本社会の停滞性と、出口なしの状態に置かれる若い世代の肌身に迫る閉塞感を、硬質なリアリズムで描き出しています。

小説から引用すると「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」(三二四頁)と言われます。これは物語中の中学生のせりふです。

「きつかけは何でもよかったんです。連中はいつ爆発してもおかしくなくらい追い詰められていたんです。……この四、五年で一流と言われたいろいろな企業や銀行がつぶれたでしょう。東大卒のおじさんが汚職したり、失業して自殺したりしますよね。でも子どもたちはとにかくいい大学に行けて今でもそれだけを言われているんですよ。はつきりと嘘じゃないですか。……毎日毎日嘘を言われているんだから、本当にやってられないんですよ」(一六六頁)。

このようにして子どもたちがグローバルな経済の主体になることを決めていくという物語です。むしろ現実になんか起これたらいいなと思いますが、起らないですね。

以下は、今度は、物語中の大人の側の独白です。

「金融や経済の最終的なゴールは利益を生み出すことで、その利益が理想的な

庇護を生み出すことができるのだとアメリカ人は信じている。……彼らの理想は昔も今も幸福な家庭と人間関係だ。だが日本には、それが幻想に過ぎないとしても、幸福な家庭と人間関係だけは最初からあった。……良質とされる集団に属することができさえすれば、この国では幸福な家庭や人間関係は自明のものだった。その集団の質や価値観は、家族から国家まで基本的には同じで、誰もが、誰かから庇護され誰かを庇護するという感覚を持つことができた。アメリカ型競争社会を導入するということは、共同体からの無条件の庇護が失われるということなのかも知れない。……大前提的な庇護を失い、個人が個人として生きるようになるという概念をまだ日本人は持つことができないでいる」(二〇九—二一〇頁)。

トマ・ピケティの「二一世紀の資本」にも言及しておこうと思います。この話題になった書物の原題は「二一世紀の資本論」であると思いますが、しかし、訳者の山形浩生氏は「資本」と訳している。「資本論」ではさすがにまずいだろうということではないかと思えます。これも興味深い点です。

この本について私は、ボストンの「マルクス主義と近代性」(『季刊 変革のアソシエ』第一九号掲載)

②の訳者解説で、批評的なコメントを書きました。結局この本の理論的な主張は、経済的不平等を政策で是正すべきであるという政

『資本論』とは、産業予備軍についての書であり、現代における lost population (失われた人々) についての書である。

国家の役割

1) ピケティ=富の格差の是正、国民的富の分配装置としての国家=結果平等

2) フリードマン=個人のグローバル化を援助する装置としての国家=機会平等

3) ポストン・ホロウェイ=政治（分配）は真の問題ではない、国家は克服すべき真の対象ではない=資本主義の超克

策提言に集約されます。あと、緻密な歴史的データの分析は有用だったとは思いますが。しかしそれをもって『二世紀の資本論』を名乗る感覚は理解できません。以下のように私は批評しています。

「なるほど経済的不平等は、確かに資本の運動の効果の一つである。重要な効果の一つであるといつても良い。しかしそのことはすでにマルクスの時代の以前から明らかなることであり、その是正のために有効な政策をどう定めるのがマルクスの問題意識であつたと

するならば、あれほどの綿密で周到な理論構成を組み立てて、〈資本〉という対象の運動の性質を分析する必要があつただろうか。そこにはやはり、われわれ人間が生み出してしまった〈資本〉という観念的かつ物質的な構成物が獲得してしまった自律的な運動性への問題意識があつたといつてまちがいはないと思われる。つまり資本の運動がわれわれ人類の主体性や社会のあり方、そして地球環境までをどのように変容させてしまうかという文明的な問題意識である。」

「それは国民国家規模の政策論の立場からすれば、むしろ余計な、過度に哲学的な問題意識であつたかも知れないが、資本の運動の効果への手当てではなくて、資本の運動そのものをわれわれ人類は超克しなければならぬという問題意識がなければ、あのような理論的な仕事は必要になつたはずである。」

このように私は、「二世紀の資本論」と自著を名付けるピケティに対して批判的です。ところでもう一つ参考に、私が現在翻訳している Frederic Jameson の "Representing Capital" (邦訳『21世紀に、資本論をいかに読むべきか』)^③ という本がありますが、この本でジェイムソンは、「資本論」は労働予備軍についての書であり、現代における lost population (失われた人々) についての書であると、述べています。

だから経済格差、その中には労働の格差も含まれますが、そういうことを言いたいのではなくて、資本の有機的構成の高度化の結果の lost population についての問題提起として読むべきであるとジェイムソンも言っています。

まとめ

さて今日の話のまとめとして、グローバル化が進行する中で国家の果たすべき役割についての主張を分類すると、次の三つになります。

第一の立場は、富の格差が問題であつて是正すべきだというピケティに代表される立場です。すなわち国民的富の分配装置として国家をとらえるわけです。ピケティは「社会国家」といつている。社会福祉国家は二〇世紀を通じて

1) ピケティ=2.0の意識。ロスト・ポピュレーションの倫理面（精神面）の問題を考慮していない。

2) フリードマン=3.0の意識。倫理的問題には対応しているが、「時間の支配」（勤労道徳）の問題を超克していない。（資源、環境問題についての疑問が残る）

3) ポストン・ホロウェイ=「時間の支配」を超克しようとする問題意識。経済の回転はそれでも可能かどうか不明。

発達したが、やはりこれは大事だとする立場です。結果の平等というこれもよく使われる概念ですが、これを重要視します。

これに対して、第二の立場としてはフリードマンです。彼が言っているのは、個人のグローバル化を援助する装置としての国家です。国民国家的な国家の時代は終わったのだという認識。これは機会の平等の立場に立つ考え方です。この第一、第二とも資本主義そのものについては批判をしません。

第三に、ポストンやホロウェイの取る立場は、分配は真の問題ではないという立場です。国家は資本の運動の効果であるから、資本の運動そのものを展開する中で、ある時期やはり相対的に国民国家という形式が重要になるということがあるにすぎない。社会的な形式として別に今でもなくなりはないが、相対的には役割が背景に退いてきています。その背後に変わらない資本主義のメ

理想は 2) と
3) のあいだ
にあるが、

現実 は 1) と
2) のあいだ
でしばらく
くたろう

1) ピケティ=2.0の意識。ロス
ト・ポピュレーションの倫理面
(精神面)の問題を考慮してい
ない。

2) フリードマン=3.0の意識。
倫理的問題には対応しているが、
「時間の支配」(勤労道徳)の問
題を克服していない。(資源、環
境問題についての疑問が残る)

3) ポストン・ホロウェイ=「時
間の支配」を克服しようとする問
題意識。経済の回転はそれでも可
能かどうか不明。

カニズムが続いているわけ
で、ポストンの言う抽象的
時間という形式に支配され
ることから逃れることがで
きない。物質的には高度な
生活になっているけれども
いつまでもたつても忙しい
という問題があるわけです。

さらに資源や環境の問題
がある。環境問題について
は、ピケティやフリードマ
ンはどうするのか。フリー
ドマンは環境問題について
は触れている。彼の考えは
技術で何とかするという立
場です。フリードマンの概
念を使うと、ピケティの格
差は正の国家というのは、

グローバルゼーション2・0の段階の意識である。富や格差を是正して、社会福祉で高度な生活ができない人にも生活の保証をするという構造を作ったとします。そうすると、人間には精神面での問題が残るであろうことが、今日お話ししてきた構造から推測できます。生産に携わることのできない人間、ロス
ト・ポピュレーションの精神面での問題が、重要な問題となるのではないか。
フリードマンはそのところを、要は働けばいいのだ、新たな仕事を作り出し
ていけばいいのだとして、3・0の意識で対応しています。人間、死ぬまで勉
強をしなくてはいいけないというわけです。そのポジティブ・シンキングには、
読んでみると感動すら覚えます。そうだ、仕事を作り出せばいいのだ、と。

しかし、ビジネスマンがこれに感動するのはわかりますけれども、これでは
時間の支配の問題は克服されていません。勤労道徳にどっぷり浸かっており、
競争社会の倫理そのもので

す。また、資本主義の内容
を変えないので、資源、環
境問題についての問題が残
ります。このまま資源を消
費し、環境を汚染していけ
ば、地球を使いつくしま
す。ポストン・ホロウェイ

的な問題意識というのは、
時間の支配を克服しようと
するものです。資本主義の
根本的な社会支配から抜け
出さなくてはいいけない。た
だ、経済の回転がそれで可
能かどうかわかりませ
ん。

理想は上記の、二と三の
あいだであると思います。

理想は 2) と
3) のあいだ
にあるが、

現実 は 1) と
2) のあいだ
でしばらく
くたろう

1) ピケティ=2.0の意識。ロス
ト・ポピュレーションの倫理面
(精神面)の問題を考慮してい
ない。

2) フリードマン=3.0の意識。
倫理的問題には対応しているが、
「時間の支配」(勤労道徳)の問
題を克服していない。(資源、環
境問題についての疑問が残る)

3) ポストン・ホロウェイ=「時
間の支配」を克服しようとする問
題意識。経済の回転はそれでも可
能かどうか不明。

人間は働く喜びがなければ、精神面での問題が起これると思います。しかし時間の支配は脱出したいわけで、二と三の両方を満たす解決策というものは可能なのかどうかはわからないのですが、それこそが課題であると言えます。私はこの立場を取ります。二と三の間で考えるということ、それが私の社会理論です。

一方で、現実的には一と二のあいだがしばらく続くのではないかという気がします。国家が格差を是正するための福祉国家として機能すべきだと言う主張と、いやそれでは赤字国債の面で持たないからフラット化していかなくてはけない、高度な労働、高度なビジネスを展開していくことを支える国家であるべきだという主張の間で、政治もビジネスも行くのでしょうか。おそらくはフリードマンの言うようには一気にはフラット化しないのではないかと思います。ゆるくフラット化していくのでしょうか。

(1) 本稿は、社会理論学会第二回研究大会・講演の部において「国民国家論再考——グローバル時代の国民国家」という共通テーマのもとに行なわれた講演を書き起こしたものである。講演はスライドを使いプレゼンテーションのスタイルで行なわれた。七〇枚以上のスライドが用いられたが多くを割愛し、主なものだけ収録した。

(2) 野尻英一「否定性、歴史、資本の有機構成——主体性変容の原理論のための試み——」『社会理論研究 第一四号』社会理論学会、二〇一三年、八九—一〇頁。

(3) Etichi NOJIMA, *Negativity, History and the Organic Composition of Capital: Toward a Principle Theory of Transformation of Subjectivity in Japan*, *Canadian Social Science, Canadian Academy of Oriental and Occidental Culture*, Volume 10, Number 4, pp. 1-21.

(4) ここでは言う「ポストン理論」とは、以下の著作において展開されているマルクス解釈のことを指している。Moishe Postone, *Time, Labor, and Social Domination: A Reinterpretation of Marx's Critical Theory*, Cambridge University Press, 1993. (邦訳:『時間・労働・支配: マルクス理論の新天地』白井聡・野尻英一監訳、筑摩書房、二〇一二年)。

(5) Michael Hardt and Antonio Negri, *Empire*, Harvard University Press, 2000. (邦訳: アン

トニオ・ネグリ/マイケル・ハート『帝国』——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性 水嶋一憲ほか訳、以文社、二〇〇三年)。

(6) 古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』講談社、二〇一一年。

(7) 以下の二〇一二年の記事によれば、iPhone 一台の製造時間は二四時間であると言う。ここでは一日八時間労働を仮定して、一台あたりの製造にかかる時間を三労働日とした。Horace Dediu, "How much does it cost to manufacture an iPhone?", Asymco, Feb 22, 2012.

[URL] <http://www.asymco.com/2012/02/22/the-iphone-manufacturing-cost-structure/> (二〇一五年八月三日アクセス)

(8) Anne Allison, *Precarious Japan*, Duke University Press, 2013.

(9) トーマス・フリードマン『フラット化する世界【普及版】上・中・下』伏見威蕃訳、日本経済新聞出版社、二〇一〇年 (Thomas L. Friedman, *The World Is Flat: A Brief History of the Twenty-first Century* [Further Updated and Expanded Edition], Picador, 2007)

(10) 木暮太一『僕たちはいつまでこんな働き方を続けるのか?』講談社(星海社新書)、二〇一二年。

(11) 村上龍『希望の国のエクソダス』文春文庫、二〇〇二年。

(12) モイシェ・ポストン「マルクス主義と近代性」野尻英一訳、『季刊 変革のアソシエ』第一九号所収、二〇一五年。

(13) Fredrick Jameson, *Representing Capital: A Reading Of Volume One*, Verso, 2011. (邦訳: フレドリック・ジェイムソン『21世紀に、資本論をいかに読むべきか』野尻英一訳、作品社、二〇一五年)。

(自治医科大学)

「編集」 社会理論学会
「発行所」(株) 千書房
「発売所」(株) JRC

社会理論学会事務局

〒113-0011

横浜市港北区菊名五・一・四三 菊名K'sインフォメーション1号室

千書房 気付

TEL: 〇四五・四三〇・四五三〇

FAX: 〇四五・四三〇・四五三三

E-mail: edi@sensyobo.co.jp

<http://www.sensyobo.co.jp/IST/index.html>